

「就職活動体験記」主題の経年変化の分析

Analysis of Changes in the Subject of Students' Reports about Job-search Experiences over the Years

豊田 雄彦

Yuhiko Toyoda

竹内 美香

Mika Takeuchi

石嶺 ちづる

Chizuru Ishimine

抄録 初等中等教育においても高等教育においてもキャリア教育が重要であることは論をまたない。しかしながらその目的とするところは、適性にあった適職探しから基礎的・汎用的能力の育成に焦点が移ってきており、本学においては2007年度よりキャリアガイダンスツールの一つとして学生に「就職活動体験記」の記述を求めてきた。この間にリーマンショック、東日本大震災という雇用情勢に大きな影響をおよぼす出来事を経て、学生の記述する内容にも変化が見られるようになった。本研究ではテキストマイニングを用いて、「就職活動体験記」の主題の変化を経年的かつ数量的に把握するとともに、記述されたキーワード、特に職業観・勤労観に関わるもの変化を観察した。記述からは逼迫した雇用情勢の中での就職活動体験が職業観・勤労観に現実的な変化をおよぼすことが把握できた。あわせて記述内容の変化から今後のキャリア教育のポイントになる基礎的スキルの重視や失敗体験の体系的な伝承などの提言を行う。

キーワード 勤労観 職業観 就職活動体験 キャリア教育 テキストマイニング
attitude to work view of profession Experiences of Job Hunting Career Education
Text Mining

1. はじめに
 - 1.1 勤労観・職業観の育成の変遷
 - 1.2 就業力の育成について
 - 1.3 「就職活動体験記」について
2. 本研究の方法
 - 2.1 対象者と時期
 - 2.2 分析の方法
3. 就職活動体験記の記述内容およびその経年変化
 - 3.1 就職活動体験記の記述内容
 - 3.2 勤労観・職業観を示すキーワード
 - 3.3 基礎的・汎用的能力をめぐる状況の記述
4. 就職環境の変化と就職活動体験記
 - 4.1 就職内定率と就職活動体験記
 - 4.2 就職内定率と職業観・勤労観
 - 4.3 基礎的・汎用的能力開発の必要性
 - 4.4 失敗をさせないための伝承の効果
5. キャリア教育への提言
 - 5.1 厳しい就職状況から得られるもの
 - 5.2 基礎的スキルの重視
 - 5.3 失敗体験の伝承による疑似体験の深化

1. はじめに

1.1 勤労観・職業観の育成の変遷

初等中等教育におけるキャリア教育の変遷については、平成 11 年度に中央教育審議会による「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」において、キャリア教育は「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」であるとされている。平成 14 年度に国立教育政策研究所生徒指導研究センターの「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」で、望ましい勤労観・職業観として理解、認識面について

- ①職業には貴賤がないこと
- ②職務遂行には規範の遵守や責任が伴うこと
- ③どのような職業であれ、職業には生計を維持するだけではなく、それを通して自己の能力・適性を發揮し、社会の一員としての役割を果たすという意義があること

また情意・態度面では、

- ①一人一人が自己及びその個性をかけがえのない価値あるものであるとする自覚
- ②自己と働くこと及びその関係についての総合的な検討を通じた、職業・勤労に対する自分なりの構え
- ③将来の夢や希望の実現を目指して取り組もうとする意欲的な態度

という例が示されている。

職業観、勤労観を育てるために、「教科の学習を通して生まれてくる興味や関心、知的好奇心が選択教科や総合的な学習の時間でのよ

り深化・発展した学習につながり、それがひいては上級学校や将来の職業の選択のベース」になるよう、知的好奇心を満足させることにより、進路意識を高揚させる、あるいは「学習活動など学校生活への適応、好ましい人間関係の形成、学業や進路等における選択、自己の生き方等にかかわって、適切な情報提供や案内・説明、活動体験、各種の援助・相談活動など」のガイダンス機能の充実をはかることが提案されている。

これらの例にみるよう、「わかる授業」をベースとし、知識好奇心に基づく進路意識の高揚を謳っているものの、キャリア教育の中心は自らの適性にかなった「進路」の選択に焦点があてられるようになっている。「職業観」、「勤労観」の醸成に中心がおかれる一方で、社会的、職業的自立のための教育が軽視される傾向が生じた。平成 23 年 1 月、中央教育審議会は答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」を公表し、直接「職業観」、「勤労観」を育てるのではなく、「基礎的・汎用的能力」の育成を主軸とした体系的なキャリア教育を通して、一人一人の児童生徒が、勤労観・職業観をはじめとする価値観を形成・確立できるようなキャリア教育の在り方を強調する方向修正を行うこととなった。

1.2 就業力の育成について

高等教育におけるキャリア教育の現状は以下のとおりである。即ち大学のユニバーサル化やリーマンショックなどの経済的背景もあり大学を卒業しても就職できない、あるいは学生自身の働く意識が希薄でフリーターになるなどの問題が常態化するようになった。こ

のような状況を受けて文部科学省は大学設置基準等を平成22年2月に改正し(平成23年4月より施行)、学生が社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うことができるよう、大学における組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整える制度づくりを進めた。大学におけるキャリア教育の義務化である。

あわせて教育の課程内、課程外を通じて学生の就業力育成のための取組の充実をはかり、産業界との連携による課題解決型授業やインターンシップの推進、学生の職業観・勤労観の醸成など、就業力向上のための大学の取組を支援する指導を強化することとなった(「大学生の就業力育成支援事業」)。

就業力とは、大学設置基準によれば「学生が卒業後自らの素質を向上させ、社会的・職業的自立を図るために必要な能力」と定義することができる。

1.3 「就職活動体験記」について

本学はビジネス系の短期大学であり、もとより職業教育を重視してきた歴史が長い。前述の就業力育成強化の声を受けて、キャリア教育充実のために「キャリア実践共通コース」を設置し、平成22年度文部科学省の大学生の就業力育成支援事業に採択された。

上記の取り組みの基礎となったプログラムの一つとして、「就職活動体験記」に基づくケース研究があげられる。これは対人コミュニケーション能力の育成と他者サポートを通じて自己啓発・成長を促進することを目的として2007年度から開講している「学びのサポート」科目の場面で実施されている教育プログラムである。「就職活動体験記」(以下、体

験記と略す)を作成、執筆した2年生自らが、体験記を媒介として後輩である1年生とコミュニケーションを図ることが、この科目の対人演習課題の一つである。2年生が書いた体験ケースを教材とすることで、「就職活動開始前夜」の1年生に就業に関するリアリティを醸成させることができる。

学生の授業後のふりかえりなどから、学生による体験記の活用には、大別して3つの効用が確認されている。第一は、学生自身が自分の経験を第三者的な視点をもって節度ある客觀化と総括をする作業として価値を感じていることがわかっている。第二に、彼らが直面している就職市場の動向とそれに伴う困難や困惑の実態を、教育スタッフ・キャリア支援スタッフが、そのメンタル面の様相をも推測できる形で詳細に知る手がかりとすることができますのも利点である。第三は、年度毎に変化する求人状況によって多少の変動があるものの、先輩から後輩への活動経験や情報、教訓などの伝承が可能になる点である。¹⁾

今回の研究では第一の効用のうち、特に職業観・勤労観にかかる言及をしているケース、および第三の効用について、体験記を経年的に分析することにより、その効果を測定するとともに、このプログラムがさらに効果を発揮するための活用方法について提案する。

2. 本研究の方法

2.1 対象者と時期

本学において体験記の取り組みは2007年度より実施されており、現時点では2012年度に記述された体験記が最新のものとなる。この6年間にわたる体験記を分析の対象とする。記述の時期はいずれの年度も夏期休暇の

課題として、8~9月に記述されたものである。ただし2007年度においては「学びのサポート」科目が必修ではなかったため、当該科目を履修していた一部の学生によるものである。年度ごとの記述者数、記述された総段落数を表1に示す。

表1 年度ごとの記述者数、総段落数

年度	記述者数	総段落数
2007年度	169	887
2008年度	382	1828
2009年度	444	1980
2010年度	458	1827
2011年度	325	1302
2012年度	388	1304

2.2 分析の方法

本研究では体験記の活用結果のうち、第一の自らの就職活動体験の客観視と第三の伝承がどのように行われているかを体験記の主題を捉えることによって把握したい。主題を捉える方法としてテキストマイニングを採用した。体験記よりキーワードを抽出し、抽出さ

れたキーワードに対して数量化III類を実施することにより、相関の高いキーワードを分類し、そのキーワードの集合により主題を類推した。キーワードの抽出、数量化III類の実施には「WordMiner」（日本電子計算株式会社製）を使用した。

また今後のキャリア教育の実施に有益と思われる記述の抽出についてはキーワードを検索し、その前後の記述（コンコーダンス）を見るにより、内容を検討することとした。

3. 就職活動体験記の記述内容およびその経年変化

3.1 就職活動体験記の記述内容

体験記の本文を形態素に分解し、そこから抽出された名詞を中心としたキーワードを相關の高い群にまとめることにより、96のクラスターに分類することができた。クラスターに含まれるキーワードから記述された内容の主題を推測することにより、さらに27の分類を行った。表2にそのうち累積で90%近く

表2 推測された主題とその変動の傾向

想定される主題	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	総計	変動の傾向
周囲のサポート	19.2%	17.3%	15.8%	17.6%	13.8%	15.0%	16.4%	
会場へのアクセス(遅刻)	12.1%	15.3%	14.3%	12.8%	14.4%	7.9%	13.1%	
就職開始時期	5.5%	7.1%	7.7%	10.0%	11.6%	13.1%	9.2%	
面接試験	14.7%	11.5%	9.8%	8.3%	7.6%	7.0%	9.6%	
筆記試験	2.9%	3.0%	3.4%	2.7%	2.9%	2.0%	2.9%	
エントリー	3.0%	2.7%	4.0%	2.9%	3.1%	4.9%	3.4%	
職種の決定	2.7%	3.0%	3.9%	4.9%	4.3%	4.3%	3.9%	
会社からの連絡	3.3%	3.1%	2.0%	1.0%	0.8%	0.5%	1.8%	
就活準備	1.8%	1.5%	1.8%	2.4%	2.7%	2.4%	2.1%	
ファンションと就職	0.9%	1.3%	1.5%	2.7%	2.1%	2.5%	1.9%	
医療関係の仕事	1.2%	2.2%	1.9%	2.5%	2.5%	1.6%	2.0%	
就職活動プロセス	2.4%	2.1%	2.1%	2.4%	2.9%	2.5%	2.4%	
試験結果	5.7%	8.7%	5.9%	6.7%	5.7%	8.5%	6.9%	
支援センターのサポート	2.8%	3.9%	5.4%	5.1%	4.5%	7.1%	4.9%	
希望との折り合い	3.7%	2.7%	2.6%	2.3%	4.1%	3.5%	3.0%	
会社の対応	3.3%	3.1%	2.6%	2.1%	2.2%	1.9%	2.5%	
結果のふりかえり	1.7%	1.7%	2.0%	1.6%	1.4%	1.8%	1.7%	
その他	13.1%	9.9%	13.3%	11.9%	13.3%	13.7%	12.4%	

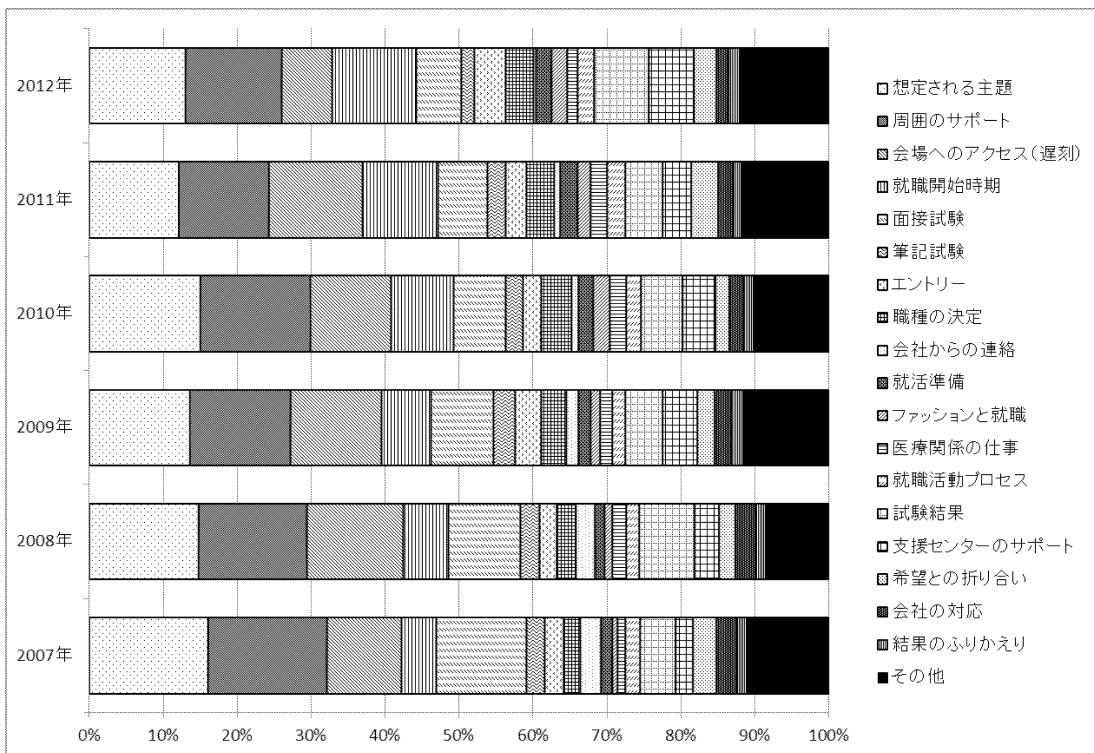


図1 主題の年度ごとの変化

表3 主題と特徴的なキーワード

推測される主題	特徴的なキーワード
周囲のサポート	友達、家族、感謝、就職活動、周り、内定、ペース、友人、仲間、クラス
会場へのアクセス(遅刻)	会場、場所、時間、道、受付、駅、到着、遅刻、行き方、電車
就職開始時期	2年生、短大、1年生、就職、就職活動、仕事、地元、職種、将来、本格的
面接試験	短所、予想外、質問、自己PR、面接、志望動機、アピール、面接官、長所、内容
筆記試験	筆記試験、S P I、勉強、一般常識、エントリーシート、数学、通過、問題、試験、結果
内定時の状況	内定、結果、夏休み、自分、選考、いただく、気持ち、本当、面接、自信
エントリー	添削、履歴書、エントリーシート、提出、完成、締め切り、記入、文章、志望動機、予約
職種の決定	職種、仕事、興味、視野、業種、業界、職業、事務、事務職、様々
会社からの連絡	トキドキ、電話、連絡、日、人事、最終面接、合格、1週間後、数日後、採用担当
就活準備	大切、面接、経験、企業研究、きちん、自己分析、アピール、失敗、自分、重要
ファッションと就職	2年生、髪、就職活動、春休み、周り、クラス、マイペース、友達、毛、学校
医療関係の仕事	医療、医療事務、情報サービスコース、歯科助手、勉強、仕事、短大、医療関係、病院、時期
就職活動プロセス	参加、1年生、2年生、登録、合同説明会、短期大学、就職サイト、マイナビ、就職活動、2月頃
試験結果	結果、不採用、内定、最終面接、残念、第一志望、内々定、学校推薦、辞退
支援センターのサポート	紹介、電話、推薦、求人、キャリア支援センター、日、報告、連絡、一ヶ月、頻繁
希望との折り合い	夢、就職、人生、生活、将来、仕事、無駄、海外、留学、アルバイト
会社の対応	人事、社員、会社、総合職、方々、良さ、人事部、雰囲気、仕事内容、入社
結果のふりかえり	面接、内定、結果、自信、練習、反省、無事、企業研究、大切、失敗、原因、経験、本命、不採用

を占める 18 の主題を示す。表最後の列は年度ごとの変動の傾向を表している。図 1 は推測された主題ごとの割合を年度ごとに表している。年度ごとに多少の変動はあるものの、ほぼ同様の割合で推移していることが見て取れる。表 3 には推測された主題に含まれているキーワードを示す。

ただしこのキーワードからは出題の指定により当然に記述される「就職活動」、ケースの主人公を表す「A子」、就職活動に直接関連しないと思われる語、「日」、「何」などの語を除外している。

3.2 勤労観、職業観を示すキーワード

国立教育政策研究所生徒指導研究センターからの報告「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」における、望ましい勤労観・職業観の情意・態度面の「②自己と働くこと及びその関係についての総合的な検討を通じた、職業・勤労に対する自分なりの構え」と関連して、就職活動体験が勤労観・職業観の形成にどのように影響したかを記述内容より把握できるか試行した。

記述された本文には勤労観、職業観といっ

た単語が直接表記されてはいないが、本人の希望した業界、職種との関連で「夢」という語の出現状況をみると 2007 年度は 16 件、2008 年度は 31 件、2009 年度は 39 件、2010 年度は 39 件、2011 年度は 29 件、2012 年度は 26 件と年度に関わらず一定の出現回数となっている。図 2 に夢という語とその段落に共起する語のカテゴリとの関連を示す。例えば職業というカテゴリは「職業」、「職」、「仕事」という語をまとめたものである。夢という語が 162 件出現している中で、職業に結びついているものが 59 件と多くをしめる。「あきらめる」、「辞める」、「妥協」という語にも 4 件結びついている。ただし夢を優先するために就職活動を辞めたという記述は 2012 年度に 1 例出てくるのみである。

就職活動を体験して、職業観などに変化をもたらしたと思われる記述が見られる。例えば次のような記述である。

「就職活動は、いくつもある企業の中で『私はこの職種でしか受けない。』と初めから決めていては、自分の適性と合っている良い企業を見落としてしまいます。この経験を通して A 子は、初めから職種や業種を絞り込まない

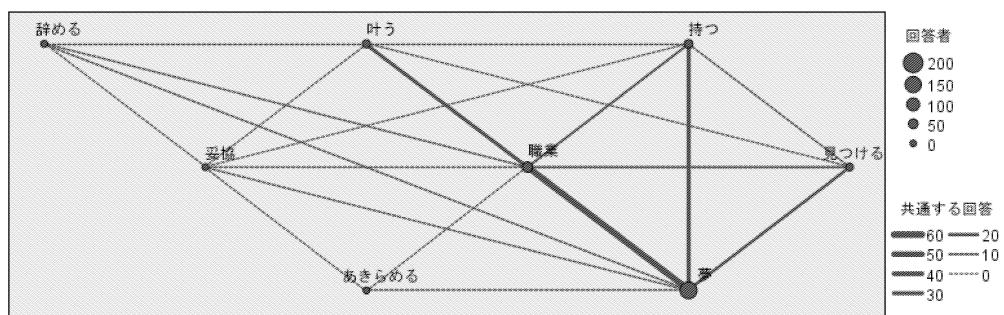


図 2 夢という語と関連する語群の関連

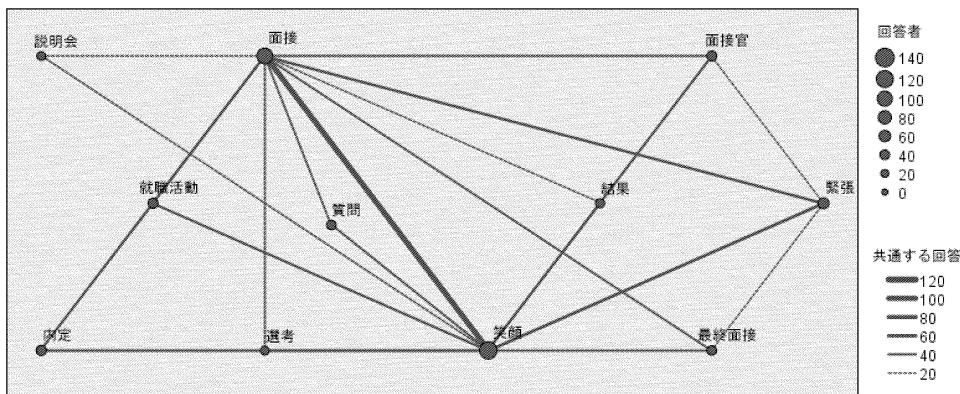


図3 面接という語と関連する語群の関連

で幅広くエントリーをし、様々な企業を見て自分の足でその企業へ行き、調べてみることが大切だと学びました。自分の視野を狭めないことが就職活動を成功させる近道だと思いました。」

「自分の行きたかった会社の試験が終わってしまってから自分の夢を叶えるための近道を考えるようになりました。その結果、編入という道はなくなりました。なぜなら四年制大学が有利だと思って編入を考えていましたが、今回でそんなの自分の努力次第だということが分かったからです。最終的には違う会社に就職し、その後、既卒試験で再チャレンジすると決めました。そうと決めてから少しでも既卒試験で役立つようにと接客業を調べ始め、1社目で内定をいただくことが出来ました。まだ募集が出ているので、ぎりぎりまで視野を広げて就活を続けるつもりです。A子は今回のことを通じて、幅広く物事を見ることの大切さを知りました。」

「幅広く」という単語が出現するのは、2009年度に7件、2010年度～12年度にそれぞれ5

件と2008年度以前の記述には見られない。

同様に「視野」という語も2007年度は3件、2008年度は10件、2009年度は60件、2010年度は60件、2011年度は40件、2012年度は49件と2009年度を境に急増している。「視野」は「もっと早く就職活動を始め、1つに絞らずにもっと視野を広げて調べていけばよかったですと思うし、就職活動から逃げずに、しっかりキャリア支援センターに通い、自ら動くことが大事という当たり前のことを改めて思い知られた。」というように、ほとんどが「を広げて」、「に入れて」という語と共にしており、就職活動に直面して考え方の柔軟性が出てきたことを示している。

反面、就職に際して、就業そのものよりも自らの余暇を重視する傾向も見受けられる。例えば土曜、日曜に休日が設定されている職種等にこだわる記述である。「土日」という語は2007年度に2件、2008年度は9件、2009年度は8件、2010年度は10件、2011年度は15件、2012年度は6件出現する。

3.3 基礎的・汎用的能力をめぐる状況の記述

キャリア教育においては基礎的・汎用的能力が重視されるようになった。就職活動の場面では、基礎的・汎用的能力が直接的に関連するのは、その能力を確認する機会となる採用試験の場面である。採用試験は面接試験と筆記試験に大別できるが、それぞれの体験記における記述を確認したい。

「面接試験」に関する記述は2007年度297件、2008年度664件、2009年度639件、2010年度557件、2011年度358件、2012年度423件と2011年度を底にかなりの変動がみられるが、出現頻度の高い語といふことができる。図3に面接という語とその段落に共起する語のカテゴリを示す。「面接官」や「質問」、「緊張」といった面接試験に関連する語を含むカテゴリが多いが、もっと多いのは「笑顔」というカテゴリで、109段落に出現する。その記述を見ると「面接の最中に緊張と、力のなさと、的確に答える事のできない悔しさと悲しさから泣きたくなってしまったが、なんとか笑顔で乗り切った」、「A子の発言に対してすべて嫌な風につっこまれ、A子は何度か頭が真っ白になり（そんな言い方しなくともいいのに・・・まるで圧迫面接じゃん！）と思い泣きそうになりました。しかし、A子は今まで自分がやってきたことを思い出し（ここで負けてたまるか！）と気持ちを切り替えて、泣きそうになりながらも笑顔を忘れず、言葉を途中で詰まらせながらも必死で答えていました」というようなストレス耐性を示す記述や「一人で面接練習していようかと考えていたのですが、友人C子D子が付き合ってくれると言ってくれました。（中略）自分でいくつか質問を予想して言いたいことを考えてい

たのですが、それを整理するのも手伝ってもらいました。そのおかげでA子は自信をもつて面接に臨むことが出来ました。あんなに恐れていた面接だったのですが、面接中も笑顔を意識しながら自信を持って自分をアピールすることが出来ました」や準備して面接に臨んだため余裕をもって対応できたという記述がある一方で「一番初めに挙手した学生B子は、元気よくハキハキと部活のことを話し始め、身振り手振りで、笑顔で話していく、上手に自分をアピールできているのを見て、A子は何をアピールすればいいのかととても不安になり、緊張で頭が真っ白になりました」、「面接官も他の学生が答えているときは、すごく笑顔でそれを見てさらにA子は自信とやる気をなくし最後まであまりうまく答えられませんでした」といった場馴れした受験生に圧倒されたという記述もある。学生により能力を發揮する度合いに差が見られる内容となっている。

「筆記試験」に関する記述は年度ごとに減少の傾向にあるが、「SPI」という語に関しては2007年度10件、2008年度16件、2009年度19件、2010年度22件、2011年度21件、2012年度36件と増加傾向にある。

2007年度の記述には「社内で会議したところ、実はAさんSPIの時点では合格点には届いていなかったのですが、希望動機などを拝見し是非Aさんに会ってみたいということなのでグループ面接や最終面接に参加していただきました。そして社内で会議した結果SPIなどにいつくか気になる点があるのでAさんがよければもう一度SPIを受けていただけないでしょうか？」といった事例を書いている学生もある。このような事例から学力以上に人

物を重視する企業もあるということを示すが、2008年度以降の記述には「面接に受かってもSPIで落とされることがあり」というように学力が重視されていることが読み取れる。また就職試験に筆記試験が大きなウエイトを占めることを知っていても「対策をしていない」「勉強しても点数に繋がらない」などといった準備不足の記述が多くなってきてている。

4. 就職環境の変化と就職活動体験記

4.1 就職内定率と就職活動体験記

ここ数年は2008年9月のサブプライムローン破綻を契機とするいわゆるリーマンショック、2011年3月の東日本大震災の発生など経済的環境が目まぐるしく変化した。学生の就職においても、当然そのような状況は無縁でなく、そのことが体験記の記述にも表れている。文部科学省学校基本調査による短期大学の就職率の推移を図3に表す。4月1日現在の就職内定率は翌年4月1日現在の状況を示す。

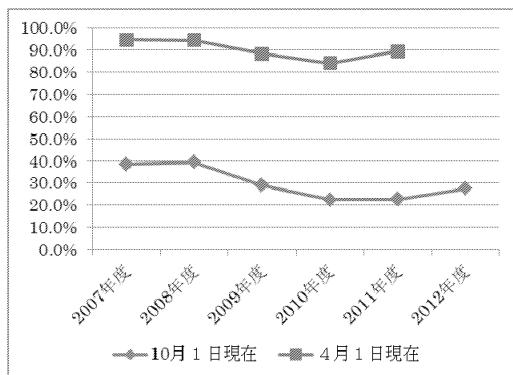


図3 就職内定率の推移

(出典：文部科学省 学校基本調査)

リーマンショックを契機として、就職内定率が減少傾向にあることがわかる。

就職内定率の推移と体験記の記述状況の変化を把握するため、体験記の各主題の比率と就職内定率の相関を求めた。体験記は8月～9月にかけて記述されたものであるため、就職内定率は10月1日現在のものを使用した。その結果を表4に示す。

相関係数が0.7以上の主題を列挙すると「面接試験」「会社からの連絡」「会社の対応」が挙げられる。就職状況が厳しいために、面接試験まで至っていないなかつたり、会社とのコンタクトも薄かつたりするため、会社との連絡や対応に関する記述が少なくなっているものと考えられる。逆に-0.7以下のものを列挙すると「就職開始時期」「就活準備」「ファンションと就職」が挙げられる。就職活動が本格化していないため就職開始の時期や準備のこと、就職活動のための髪の毛の色のことなどを話題にせざるを得なかったと考えられる。

「会場へのアクセス（遅刻）」を主題とする記述は就職状況とは無相関に一定の割合の記述があったが、2012年度になって初めての割合が減少した。これは本学の「大学生の就業力育成支援事業」採択によりキャリア教育カリキュラムを変更し、体験記を「学びのサポート」ではなく「就業とキャリア考」で記述するようになった影響も考えられる。「就業とキャリア考」では前期に就職活動や就職後の先輩のケースなど分析することにより、自らのキャリア形成を考える契機になることを企図している。会場へ遅刻したというケースは体験記として比較的書きやすい主題であるが、自らのキャリアの第一歩としての就職活動体験の記述としては内容が希薄なものであると感じたのではないか。

表4 就職内定率と体験記主題の相関係数

主題	相関係数
周囲のサポート	0.630
会場へのアクセス（遅刻）	0.171
就職開始時期	-0.772
面接試験	0.854
筆記試験	0.236
エントリー	-0.263
職種の決定	-0.961
会社からの連絡	0.908
就活準備	-0.883
ファッショント就職	-0.870
医療関係の仕事	-0.577
就職活動プロセス	-0.608
試験結果	0.278
支援センターのサポート	-0.594
希望との折り合い	-0.027
会社の対応	0.896
結果のふりかえり	0.310
その他	-0.461

4.2 就職内定率と職業観・勤労観

3.2 で見たように就職活動の厳しさは自らの職業観・勤労観に大きな影響がある。リーマンショック以前の体験記には「幅広く」という語は出現しないが、それ以降の体験記には少数であるが出現する。また「視野」という語もリーマンショック後の体験記に多く見られる。自らの就職に際して希望との折り合いをつけている様子がうかがえる。変化の激しい今後を生き抜くためには、自らの夢や希望にこだわり過ぎることなく、広い視野で職業選択を考える方が望ましい職業観・勤労観であると考えられる。厳しい就職活動に直面することにより、そうした考えが導かれているという意味では、実際の就職活動の内省化することを通じて、今後のキャリアを考える上ではよい教育的効果が得られていると考え

ることもできる。

一方、文部科学省の学校基本調査によると就職者を就職先の産業分類で区分し、年次推移をみると、第3次産業の比率が上昇しており、平成23年には、平成元年3月の66.8%から14.4ポイント上昇し81.2%となり、就職者全体の約8割を占めるまでになっている。一方、第2次産業の就職者はその分低下しており、15.5ポイント低下の16.8%となっている。このような状況は貿易摩擦の結果による現地生産の広がり、安価な人件費を求めて新興国への工場移転などの状況を考えると、今後も続していくと考えられる。学生の就職先はサービス業が主体になってきているが、土日休みなどのこだわりにより、就職の間口が狭まってしまうことは注意が必要である。

4.3 基礎的・汎用的能力開発の必要性

本学の学生はグループワークなどコミュニケーションスキルを開発するプログラムで多くのトレーニングを受けていることから、面接試験には強いという評価がある一方で、必ずしもコミュニケーションスキルを発揮できないと思われる記述もある。本学においては「就業への道」におけるピアサポートによる面接体験、「学びのサポート」における上級生からの面接指導、教員・キャリア支援センター職員による「模擬面接」といった多数の準備プログラムが用意されているが、自己表現が苦手な学生が「場馴れ」をするための仕組みが必要であると考えられる。

また筆記試験においては、リーマンショック以前は筆記試験の成績が基準に達しなくても、採用されるケースがあったが、リーマンショック後は筆記試験による選別は激しくな

っている。就職試験に際して行う筆記試験の効用に関しては疑問を呈する声²⁾もあるが、一方で、大学生の学力の低下を危惧する声も大きい³⁾。大学のユニバーサル化が進んだ状況で、学位授与の方針の徹底による卒業生の質保証が実現されない限り、人物の前に基礎学力を見るという傾向は変わらないと予想される。中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」にある「学士力」においても数量的スキルなど汎用的技能は重視されており、その結果を就職試験に際して企業側が確認するのは当然のことと言えるだろう。

事前のガイダンスでは筆記試験の対策も行い、その重要性も喚起しているが、実際の記述には「選考に進むためには筆記試験に受かるための積み重ねの勉強が必要だと改めて気付かされたのです。それから、筆記試験対策の本を通学中に読んで勉強するなど地道な筆記試験対策をしっかりと行うよう努力をし、A子は、それからの筆記試験に無事に受かるようになり」というように問題に直面してはじめて実感するという様子がうかがえる。今後は課程教育の中に数量的スキルをはじめとする汎用的能力の保証を位置付けていく必要がある。

4.4 失敗をさせないための伝承の効果

体験記には就職活動にまつわる数々の失敗の記述がある。現状では体験記のケースの選択は学生にまかせており、そうした失敗について体系的に学習する機会がないが、このような記述は有効に活用できる可能性の高い教育資源である。

失敗学（畠村 2000）によれば、失敗とは「よい失敗」と「悪い失敗」に分類される。

「よい失敗」は細心の注意をはらっても、防ぎようがないが、その経験を他に生かすことで、「未知」なる知識の発掘に役立つもの。「悪い失敗」とは、そこから何も学ぶことのできない、不注意や誤判断などから繰り返される失敗のことである。

体験記には「悪い失敗」に分類される失敗が多いと考えられる。予想して対策を立てて、対処しておけば回避可能であったにも関わらず、予想しない（あるいは真剣に受け止めない）、予想しても対処しないなどの状況を見て取れる。

体験記に挙げられている失敗は以下に列挙するとおりである。

書類の提出ミス（期日遅れ、記入漏れ、写真未添付）、面接での回答ミス（自己アピール、企業研究の不足、過度の緊張）、面接時の服装、時間に遅れる、道に迷う、トイレ、就業意識の未熟、連絡のミス（電話、メール）、筆記試験への準備不足。

いずれも十分に確認、準備をすれば防げることである。こうしたケースを参考に就職活動のPDCAサイクルを確立させることができるのでないか。

5. キャリア教育への提言

5.1 厳しい就職状況から得られるもの

バブル経済崩壊後の就職状況は「就職氷河期」と評されたが、リーマンショック、東日本大震災から日本経済が受けたダメージは一時回復していた就職状況を悪化させ、「就職氷河期」が再来することとなった。こうした中、就職活動を行っていた学生の心中は想像に難くない。しかしこのような厳しい経験が将来の「生きる力」に繋がっていくと予想される

記述が体験記の中に見られた。インターンシップなどの啓発的体験や課題解決学習などを通して職業観・勤労観を育成することが考えられるが、就職活動そのものも職業観・勤労観の育成に大きな役割を果たしていると考えられる。大久保幸夫が「筏下りと山登り」で主張しているように、自らのキャリアを築いていくために就職後 10 年程度はさまざまにことにチャレンジし、自らの基礎力を磨き、その中で職業観や勤労観を確立していくものであろう。就職活動を通して、そのような意気込みと柔軟性を獲得できるのであれば、極めて有意義な体験であったのではないか。本学では就職活動も体験学習の一環ととらえて、就職活動における気づきを 1 か月程度のスパンで記録し、振り返りを行うための「就業力ポートフォリオ」や「就業とキャリア考」科目において、「就業力ポートフォリオ」に記録した体験を卒業レポートにまとめ、短大生活で獲得した就業力を評価するという仕組みを 2012 年度より実施している。就職活動を内省化する仕組みをより効果的に実施することで、就業力を高めるような就職活動を教育的に支援していくことが考えられる。

5.2 基礎的スキルの重視

本学では基礎的スキルの達成度に関して「基本技能到達度テスト」の実施を行うことにより、学生の質保証を実施しようと考えている。「基本技能到達度テスト」はパソコン操作能力、ビジネスマナー、文書作成能力、数量的スキルの 4 分野について行われているが、そうした教育の充実と厳格なスキルの測定を通じて質保証を行っていく必要がある。西村和雄ら（2001）が指摘しているように、本来

小学生時点で獲得していかなければならないスキルを大学卒業後も獲得していないのは明らかに問題である。就職試験でそうしたスキルに関する検査が行われるのは、学習のための一つの誘因になるであろう。基礎的スキルが不足しているために、キャリアの第一歩を踏み出すことができないのは大きな損失である。

5.3 失敗体験の伝承による疑似体験の深化

体験記の記述内容は就職環境の変化に応じて変化することが確認できた。先輩からの伝承は学生の就職活動に大きな影響を与えることができると言えるが、このような環境の変化があった場合に、教員からのフォローも必要であろうと思われる。安易な成功体験の伝承にとどまることなく、体験記から就職活動の本質を読み取り、自らの行動を律していくようにすることが望まれる。

就職活動に関する失敗に関しても「失敗学」における「失敗知識データベース（失敗まだら）」のような形に学生自身に整理させる、あるいは提示することが、より有効な知識の伝承として役立ち、学生の行動のなかにマネジメントサイクルを確立することにつながるのではないだろうか。

謝辞

本研究は、文部科学省科学研究費・基盤研究（c）課題番号 22500953『学生間コミュニケーションを活性化するシステムを核としたキャリア形成支援プログラム』の一環として行われた。

注および引用

1. 豊田雄彦、竹内美香、岩崎暁、菅井郁. テキストマイニングによる「就職活動体験記」の分析.自由が丘産能短期大学紀要. Vol43. P1-13 2010
2. 村上宣寛. 「心理テスト」はウソでした。受けたみんなが馬鹿を見た. 2005. 日経BP社. 東京
3. 岡部恒治,西村和雄,戸瀬信之. 分数ができる大学生. 1999. 東洋経済新報社. 東京

参考文献

中央教育審議会. 初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）.

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm (参照日 2013-1-6)

国立教育政策研究所生徒指導研究センター. 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について.

<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/sinro/1hobun.pdf> (参照日 2013-1-6)

中央教育審議会. 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について.

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuky/chukyo0/toushin/1301877.htm (参照日 2013-1-6)

文部科学省.平成24年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査.

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/11/1328584.htm (参照日 2013-1-6)

内閣府. 平成23年版 子ども・若者白書.

http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h23honpenpdf/index_pdf.html (参照日 2013-1-6)

中央教育審議会. 学士課程教育の構築に向けて（答申）.

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuky/chukyo0/toushin/1217067.htm (参照日 2013-1-6)

大久保幸夫. 日本国型キャリアデザインの方法. 2010. 日本経団連出版. 東京

畠村洋太郎. 失敗学のすすめ. 2000. 講談社. 東京

独立行政法人科学技術振興機構. 失敗知識データベースの構造と表現.

<http://www.sozogaku.com/fkd/inf/mandara.html> (参照日 2013-1-6)